
魔法を使う者

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法を使う者

【Zマーク】

Z5268P

【作者名】

優姫

【あらすじ】

「長きにわたる戦争をやめたい」のために魔王を呼び出したカルオ。だが、魔王は戦争をやめさせたくばそちらの姫を王子と結婚させると言つ。姫はそれを受け入れ結婚する。王子と姫の未来はいつたい？

わーん！わーん！

どこかで誰かが泣いている声がした。

木が茂っている森の中で誰かが一人で泣いている。

葉を寄せて覗いてみるとそこには小さな少女が一人、座りこんで泣いていた。

もう大丈夫だよ···

少年は少女に手を差し伸べた。

「マリア様！マリア姫様！どこにいらっしゃるのですか！」
「私はここよロール。皆が心配するからあまり大きな声を出さないで。」

後ろに侍女を一人連れてマリアは自分付きの侍女頭、ロールに返事をした。

「まあ！姫様！またそのような服装をなされて！また馬に乗つておいでだつたのですか？」

「ええ、町の様子を見に行つていたの。最後に町の様子を頭の中に刻んでおきたくて···。」

マリアがそう言うとロールの瞳に突然水たまりができた。

「ど！どうしたの！？ロール！？」

「も、申し訳ありません。ですが泣かずにはいられないのです。姫様が7歳の時から1~2年間姫様だけの事を思い姫様のために尽くしてまいりましたが、まさか姫様が19歳というお若いお年でご結婚されるのだけではなくその御相手が魔界城王子のロシュ様だなんてと思うと涙が出てきてしまうのです。」

そう、私は明後日結婚する、お相手は異世界にあるという魔界とい

う国の王子、ロシコ・ゾーンという方の元へ。

何故こんな事になってしまったかと言つと・・・。

「マリア、そなたは我がミルオン王国が長きの間サギネル王国と対峙しているのは知つておるな？」

「はい。」

「近々その戦いの幕を下ろそうと思つのだ。」

「何か良い案を思いつかれたのですか！」

マリアは一瞬瞳を輝かせた。すると。

バーン！――

謁見の間の扉を壊しそうなほど大きな音が部屋に鳴り響いた。

後ろを振り返るとそこには――・・・。

「父上！母上！お話があつてまいりました！」

「ユリアス兄上？」

部屋に入ってきたのは第一王子ユリアス、マリアとは異母兄弟にあたる兄だ。

「父上！母上！どうぞうござりますか！悪魔を召喚しようとしたのは！」

その一言を聞いてマリアは驚いた。

「悪魔」それは人類が生まれる前から存在する人間の邪惡なる部分から生まれたという者達、そしてその力は強大で言うことをきかることはできず、いつたいこれまでに何人の人間が殺されただろう。「そのままの意味だ、ユリアス。明日、召喚の儀式を行い悪魔を召喚しその悪魔を使役し我々の代わりに闘つてもらひつ。」

「使役」というのは言葉のとおり強い魔力を使い悪魔を呼び出しその悪魔を自由自在に操るというもの。

「なぜです！悪魔などの力を借りずとも我がミルオンは負けはいたしません！」

「わしが何も考えず悪魔を召喚するとでも思つておるのか。ただ、勝ちたいといふ気持ちだけで悪魔召喚の儀式を行うとでも思つてお

るのか。わしはそなたらがこれから築くであろう未来のためにも戦いに終止符をうとうと言つのだ…。」

それを聞いたユリアスは後ずさつた。

「父上、ひとつお尋ねしたい。一体どの階級の悪魔を呼び出すおつもりですか？」

悪魔には階級といって下級と上級があり下級悪魔は子鬼や邪氣のたぐい、上級悪魔は魔神や魔王といつたたぐいである。

「上級悪魔を呼び出すつもりだ。」

「！？」

その後兄上と父上の話は続いたが私は何も言えなかつた。言いたくなかつた。自分は何もできないから。

翌日、東にたたずむ塔で儀式は行われた。魔術師3人と魔石を使つた儀式だ。

「ながき眠りにより目覚めよ

「古の魂を今この手に

「いですよ。上級悪魔！」

魔術師の声が部屋に響きわたると床に魔法陣が現れた、そして魔力の波動を流し始め悪魔が呼び出された。

そして、突然魔方陣の中から煙が現れ煙がなくなつたと思うと魔方陣の真上宙には一人の男性が浮いていた。

『我が名はルミデンド・ゾーン。我を呼び出すのは誰だ』

悪魔の名を聞いた魔術師達は驚いた。

「ルビデンド・ゾーン」とは確か悪魔の世界を支配する王、魔王の名だった。

「魔王が現れた！？」

「なんということだ、強大すぎるものを呼び出してしまつたか」

魔術師達が恐れの言葉を発していると父上が前に出た。

「魔王ルミデンド・ゾーンよ！我々に力を貸してほしい…長きに渡る戦いに終止符をつけたいのだ！」

魔王はカルオの真剣な気持ちが通じたのかすぐにでも了承した、が。

『ただし、条件がある。そなたの国の姫を我が息子ロシュ・ゾーンの花嫁とする』

それを聞き部屋にいるもの、カルオ・コリアス兄上・魔術師・私は驚いた、そして、

「花嫁に！？そ、それは。何故ですか！魔王様の血筋に人間の血を混ぜようと言うのですか！」

カルオが言うと

『我々の血は濃い、一人、人間の娘を娶つただけでは血はうすまらぬ。我々魔族は寿命を持たぬ。人間の娘を娶る事で人間界と魔界の関係を深めたいと私は思っている』

それを聞いた兄上が前に出た

「何を馬鹿な！そのような理由で我が妹を悪魔の嫁になどできるものか！」

『ならば力は貸さぬ。諦めよ、人間。』

私は、思っていた。自分は守られているだけで何もできないのか？大切に守られ、城の奥ふかい部屋でひとつそりと隠れ住むのか？・・・いや、違う。私には私なりにできることがあるはずだ。

「構いません。」

その言葉を聞いた者達がマリアの方を向いた。

『魔王ルミニテンドよ。私は構いません。私が王子と結婚することでこの国を・・・ミルオンを助けてくれると約束してくださるなら私は構いません。』

「な！？マリア！お前は自分が何を言つてゐるのかわかつてゐるのか！」

兄上は怒りまぎれに言つてくるが、私はちゃんとわかつてゐた。自分が何をしようとしているのかを。

『勇気ある娘よ。そなたの気持ちしかと聞きとめた。婚儀は3日後に取り行う、それまで体を清めよ。』

そう言い放ち魔王はマリアに魔法をかけた、その魔法はマリアの手

の甲に吸いつくように集まって行つた。光が收まり甲を見るとそこには印のようなものが刻まれていた。

『それは『印』^{イシ} 我が一族の加護が婚儀までの3日間そなたを守ってくれるであろう』

そう言い放ち魔王は姿を消した。マリアはそのまま脱力し失神した。

魔法を使ひ者

眠っている間夢を見た。それは何年も前の夢、今は全然覚えてない記憶の夢。この夢は最近になつて頻繁に見るよつになつた。

「えへんー母上ービーーー?えへん!」

ガサツ・・・

葉が揺れる音がして怯えた少女が後ろに振り向くと少女より2~3上の年齢に見える男の子が心配そうに見ていた。

「大丈夫?君はどうしてこんなとこりでいるの?迷子になつてしまつたの?お家に帰れないの?」

そう質問され少女は何も言わず男の子に寄り添いつゝ抱きつきました泣き出した。

「・・・め様。ひ・・・様。姫様!目をお覚ましください。」

マリアは侍女に起されたマリアが珍しく寝起きでボーッとしていると侍女が小さく微笑みながら言った。

「姫様もしや、またあの夢を見たのですか?」

(そう、あの夢はよく見る夢だつた。ずっとずっと小さい時の夢、相手の男の子の髪も声も顔も何も覚えてないけど何があつたのかだけ覚えている夢。そして・・・私の初恋の夢。)

「ええ。」

マリアは小さく答えるとベッドから起き上がりドレスに着替えず乗馬用の服を着た

「姫様?馬にお乗りになつてどちらか行くのですか?」

侍女が聞くと

「町に降りるわ。すぐ戻るわね。」

そう言い部屋を後にした。

そして、今に至る。

「ロール泣かないで。それに泣いてしまってはロシュ様に失礼でしょう？会った事もない方なのに・・・。」

「何を言うのです！姫様！魔王の御子息ですよ！？外見なんか既に決まっているようなものではありませんか！きっと頭には尖った角があり牙を見せた口に獸のような爪の・・・それはそれはおぞましい姿なのでしょう！」

ロールは侍女なので儀式の時部屋にはいなかつたので知らないのだろう。

王子の姿は見なかつたが、魔王の姿はどこからどう見ても人間にしか見えなかつたのだ。

黒く腰まで垂らされた美しい髪に血のように真っ赤な瞳身長は2mといったところぐらいだろうか。もしあの魔王が町を歩いたならきっと村娘達は釘づけになることだらう。

ロールが言うような角も牙も爪も魔王には存在しなかつたのだ。そう考えていると背後から声がした

「マリア」

後ろを振り向くと、そこにはユリアス兄上が心配そうに私を見つめていた。

「マリア。今すぐ城を出よ。」

「え？」

「城を出でずつと南に行こう。魔王に見つかぬ場所に。」

兄上が言いたい事はわかつた、だけど・・・。

「申し訳ありません、兄上。その言葉に従う事はできません。」

マリアは頭を下げた。

「・・・っ！何故だ！何故お前が魔王の元へ行かなければならぬ！お前は戦争には関係ないではないか！」

「兄上落ちつきください。侍女達が困っています。」

マリアの背後にいる侍女達は興奮気味のユリアスにあたふたしていた。それでもユリアスの興奮は止まらない。

「マリア、約束を覚えているか？」「

「約束？」

「まだお前が5歳の頃、お前はどこに行ってしまったのか迷子になつたことがあるな。その時私や母上、父上は兵に任せらず自らの足でお前を探し突如森から泣きながら姿を現したお前を先に見つけ抱きとめたのが私だったな。その時にした約束だ。」

兄上が言つているのは私が毎回見る夢のあとにあつたものだ、あの名前もわからない少年に連れられ森の外近くまで行くと少年は「ここをまっすぐ行けば人がいるよ」そう言い後ろを振り返り走つて消えてしまったのだ。

「ええ、覚えております。『必ず守る』でしたよね？」

「ああ、私は約束した、お前を何があつても守ると。だから今回もお前を魔界になど連れて行かせん！」

兄上のその優しいところは大好きだった、約束をかわしてからは兄上はすつと私と一緒にしてくれた。怖い夢を見て泣きながら兄上の部屋に行くと理由も聞かず横にずれ頭を撫でながら眠つてくれたり、乗馬の練習の時も私を抱きしめるようにして後ろにまたがり直接指導してくれた。だが、今回は仕方のないことだ。

「兄上、私を守りたいとおっしゃるのでしたら国を、国をお守りください。私はこの国と父上、母上、兄上のために魔界に嫁ぐのです。それならば兄上は私が涙を流しながら手放した者達を兄上がお守りください。」

魔法を使ひ者

それから一日後婚儀の日がやつてきた。

婚儀は人間界の我が国で行われる事になった。
私は部屋でドレスに着替えていた。

婚儀のドレスは純白と決まつてゐるが魔界の婚儀のドレスの色は黒
らしくマリアは純白ではなく漆黒のドレスに漆黒色のヴェールをか
ぶらされた。

「さすが姫様ですね！漆黒のドレスもとてもお似合いです！」
涙をこらえながら一生懸命笑顔を作り褒め言葉を言つロールに私も
微笑んで礼を言つ。

すると、部屋の扉を誰かがノックした。

「誰かしら？兄上かもしれないわね。」

そう言いロールに目をやるとロールが扉を少し開けノックをした人
物を見て目を見開かせた。

「ロール？どうしたの？兄上じやないの？」

私の声に気付いたロールがあたふたとしながら扉を開けるとそこには、鴉の羽と同じ色の髪に血のような真っ赤な瞳身長は185はあるだろうそしてかなりの美貌の持ち主がそこに立っていた。
年は2つ上くらいだろうか。

（なんでだろう？なんだか・・・とても懐かしいような気が・・・）

「あなたがマリアか？私の名は魔界城第一王子ロシュ・ゾーン。あなたとの婿になる者だ。」

少し低めで透き通った声が自己紹介をしてきた。

「あなたが・・・ロシュ様？私は！」

私も自己紹介しようとするといつのまにかマリアの目の前まで來
いた青年は指をマリアの唇にあてた

「紹介は無用。あなたのこととて知らない事はないからな。」

「え？ それはどういふ？」

私がそう尋ねてもロシュ様は何も言わずただ、フッと微笑んでくれた。

「さあ、行こう我が妃なる娘よ。」

そう言い床に膝をつけ手を差し出してきた。マリアはためらいなく手を取り式場に向かつた。

婚儀は無事成功した。

「義父様。これからよろしくおねがいいたします。」

最初に魔王を召喚した時の部屋へロシュ・マリア・カルオ・サリナ・ユリアスは行き魔王にあいさつをした。

『約束どおりこの国は守ろう、ロシュよ。この国はお前が守れそれまで城に帰る事は許さん』

「はい父上。」

それを聞いた兄上が叫んだ

「な！ どおいうことだ！ 魔王が国を守るのではないのか！ このような力もなさそうな者に国をまかせるくらいなら……！」

『ミルオン国第一王子よ。ロシュは私以上の力の持ち主、必ずこの国を救つてくれようぞ。』

そう言い残し魔王は煙のように姿を消した。

「義父様より力がお強い？」

その言葉を言つたのはマリアだった。隣にいたロシュがその言葉を聞くと

「ああ。確かに魔力は父上より私の方が上だろう今は『き母上が御子だったのだ、しかも相当なる力の持ち主だったと聞いた。」

「え！ ？ 御子様ですか！ ？ で、ではロシュ様は半分人間？」

それを聞いたカルオ達が驚きに身体を震わせた。

だが、ロシュはそこから先は何も言わなかつた。ただ、何故かユリアス兄上と睨みあつていた。

その後私とロシュは自分達の部屋に戻った。が、私はやはり自分の部屋ではなく大きな寝台の置かれた部屋に家具などは移動された。風呂に入り、寝着に着替えロールが髪をすいていとノックがなつた。

ロールが嬉しそうに扉を開け

「姫様、ロシュ様ですよ。」

と、なんだか嬉しそうと言つた。（わざわざまで怯えてたのに・・・さすがねロシュ様・・・）

「入れて差し上げて。」

マリアがそういうとロールは興奮したまま扉を開けたそこには確かにさつきまで一緒にいたロシュが立つていた。

ロシュが部屋に入るなり

「さがれ」

とロールに言つと、ロールは口元手を遮り「マーマ」と笑いながら部屋を出ていった。

「あの、ロシュ様？お聞きしたい事があるのですが・・・。」

「なんだ？」

「あの・・・前にどこかでお会いしたことありますんか？」「・・・。何故だ？」

「い、いえ！あの・・・とても懐かしい気がするのです。」

「そうか、だが。会つたのは初めてだと想うぞ。マリア。」

「はい？」

マリアが返事をすると同時にロシュはマリアの傍まで行き抱き上げた。

「キヤツ！ロ、ロシュ様！…どうなさいたのですか！？」

ロシュはマリアを抱きかかるとそのまま寝台に向かい、マリアをゆっくりと寝台の上に下ろした。

マリアは意味がわからず周りをキョロキョロして、ある事に気づいた。自分の身体が檻の中にあることに気が付いた。マリアの両脇にある少し引きしまった綺麗な腕。体を覆うような広い胸。足の動きを封じ

込めようとするロ。

「ロ、ロシュさん……ん！」

名前を呼ばると強引にその唇はロシュのそれによつてふさがれた。

強引にされたキスは何故か優しくマリアを怖がらせなによりとう気持ちがあるようなキスだった。

「ロ、ロシュ……様……」

生まれて初めてのキスを体験したマリアは一度のキスで十分幸せな気持ちになっていた。

「マリア、君は美しいな。君のような女性を妻にできた私は幸せ者だ。」

「ロ、ロシュ様そのような事おっしゃらないで。私……」
頬を真っ赤に染め両手で頬を隠すマリアを見て、ロシュは何かが身体の奥の方から湧き上がってくる感覚に気付いた。

「マリア、怖くは……ないか？」

「え？」

「私は……魔界の王族だ。人間界の者ではない。そんな者といきなり結婚させられて……いきなりこんな状態になつて……怖くはないか？」

ロシュは悲しそうな表情でマリアを見ている。

「確かに怖かつたです。国を守るために呼びだした魔界の王、人間を苦しめるとしてきた魔物達の王である魔王様の御子息と結婚……確かに怖かつたですが。始めてロシュ様を拝見した時はつきりしました、ロシュ様の瞳は血の色と同じですが薔薇の色、ルビーの色とても綺麗な瞳をしておりです。そのような瞳の方がおそろしいなんて、私そんな事もう思いません。それに、もし怖い方なら今そんな事お聞きにならないでしょう？」

マリアは微笑みながらロシュに尋ねた。

「フ……どうやら昔も今も変わらないようだなお前は……」「え？」

「いや、なんでもない。」

そう言つてマリアの顎に指を添え今度はさつとま違つ深いキスをマリアにした。

ロシュの口から何か温かい物がマリアの唇をなぞり奥に入つてくる。
「ん・・・ふ・・・」

ロシュの唇がマリアのそれから離れると今度はロシュの唇はマリアの耳へと云つた。その間ロシュの手はマリアの胸の前で止まる
「んつ・・・あつ、あつ・・・」

耳の中でくちゅり、といつ音が響きマリアの身体がそれに反応する
ように震える。

「これは嫌いか?」

耳元で囁かれマリアの表情がまた真つ赤になる。そして
「いいえ。大丈夫です。もつと・・・もつとしてください。私はあなた
の妻になりたいのです。」

マリアがそう言つとロシュのもつと方の手がマリアの太腿まで流れ
る。薄布の上から卑劣をなぞる
「んつあつああ！！」

「マリア・・・」

胸を触る手は胸の先端にある尖りを転がす

「ひつ・うつ・・・ん・・・ああ！」

たまに転がすのをやめ尖りに噛みつくと

「きや！ああ！口、ロシュ・・・そ・・まああ！」

「マリア、美しい声で鳴くな・・お前は・・・。もつと鳴かせたく
なるよ。」

「口・・シユ様・・・か・・まいません。もつと、あなたのお気に
・めすままに」

そう言つてマリアは自分の手をロシュの首の後ろにかけ口づけをした。
口づけと同時にマリアの卑劣を守っていた薄布が脱がされ胸にあつた手はマリアの足を掴み卑劣の部分を露にした。

「んつ・・・やー口・・ロシュ様！見ないでください・・・恥ずか

し
い
・
・
・
」

「可愛いよ・・・マリア。もう、私のものだ。」

そう言いマリアの濡れた卑劣に口をつける

「 もちああつー！あつああー！あつだ・・だ・・めえー！あああーー！」

奥歯が口ジニの歯から離れると口ジニの下井虫がマニスの奥歯に近

」
マ

「マリア、とても痛いかもしさないけど、大丈夫かし? 無理なら言つてくれやめるから。」

アリの糞に傷しく角ねがから心酔をてる口済を見

「大丈夫です。私をあなたの妻にしてください！」

「アーティスト・ルーツ」

マリアの卑劣が開かれた。温かい筒のようなものかマリアの卑劣を避け入つていく。

卷之三

「アーティストのアート」

マリアの胸の尖りを触りながら卑劣の滑りを良くしながらゆづくり

卷之三

八
・
・
・
・
つ
て
・
・
一

口シエの物が全て入ったのにマリアはわざいた

「… わかる… かい? マリア。君は今、私の完全な妻にな

「あつ！ああ！！

ロシュはマリアの両腿を持ちマリアの中にある筒状のもの出した
り入れたりした。

「あつんん！ 口・・・ロシュ や・・・ああ！ んん。 も・・・も・・・
だめ・・・え！」

口シユの動きが激しくなるにつれマリアの中で何かが渦巻く感覚が

生まれた。

「あっ！..だ・・め・・・ええ！..！」

「マリア・・・つ・・・マリア！」

「あっああああああああ！」

「・・・つ！..！」

ビクンッとアリスの身体が大きく震えた。同時に得も言われぬ快感に全身が支配される。ロシュの物を咥えこんだ卑劣がきつきつくそれを絞め付けた。その流れに逆らうことなどできるはずもなく。ロシュはその思いの丈を全てアリスの中に注ぎ込んだ。そして一人の長い長い夜は終わった。

魔法を使ひ者

朝、目が覚めるとマリアはロシュの腕の中にいた。

マリアはまだ眠っている頭で昨夜の事を思い出し頬を真っ赤に染めてしまつた。すると頭の上から声がした。

「おはよう」

上を向くと悪戯な微笑みを浮かべてロシュがマリアを見ながら笑つていた。

「ロ、ロシュ様！？起きてらつしゃつたのですか！？」

「ああ、君が目を覚ますと前からね。君の可愛く愛らしい寝顔を見ていた。」

「まあ！」

マリアはまたもや頬を染めてしまつた。

二人は寝台から身体を起こすと寝着に着替えロシュは「また後で」と言い残し自分の部屋へ帰つて行つた。ロシュが部屋を出していくと同時に侍女が部屋へやつてきて着替えを手伝つてくれた。

その後着替え終わり髪を結い終わるとまたもロシュが部屋へ迎えに来てくれたので二人で大広間へ移動し朝食をとりに行つた。

朝食の席にはカルオ・カルオの妃のサリナ・マリアの異母兄のユリスが席についていた。

「おお、おはよう。二人とも。ゆつくり眠れたかな？」

「おはようございます、父上。」

「おはようございます、カルオ様」

ロシュは笑顔でカルオに挨拶を返すと席についた

「マリアおはよう。良い夢は見れたか？」

「おはよう兄上。とてもいい気分で眠れました。」

「それは良かったな。」

笑顔でマリアとそのように会話を続けた後ユリアスは睨むような目

ついでロシュを見

「・・・・・おはよう、ロシュ様・・・」

「おはようございます、コリアス殿。」

そんな兄上にも笑顔で挨拶を返すロシュ
(「この二人仲悪いのかしら?なぜ?昨日会つたばかりのはずなのに・・・?」)

朝食が終わり廊下を歩いていると

「ロシュ様」

どこからか少し年老いたような声が聞こえてきて足元を見るとそこには小さな子鬼が跪いていた。

「え!?この子は?/??」

「ああ、マリアは見えるようになつたばかりだつたな。魔界の住人で私の警護の者の一人だ。」

「ど、どうしていきなり見えるようになつたの?/??」

「それは・・・昨晩繋がつた時にあなたの中に私の気を入れておいたので見えるようになったのだろう。」

そう言われマリアは昨晩の事を思い出し頬を染めてしまった。

「あの、ロシュ様?」

「ああ、それで?用はなんだ。」

存在を忘れていた子鬼が話やすいようロシュは肩膝を床につけ子鬼に近づいた。

「あの、ザギネル王国の事なのですが・・・近々ミルオン王国に攻め入る手はずのようです。」

「そうか、ではそのままばれぬようザギネルの行動を見ていくれ。あと、私と姫が結婚したことはザギネルの国のやつらは知っているのか?」

「いえ、まだ気付いていないようです。」

「そうか。わかった。さがれ」

その言葉を聞き子鬼はマリアに頭を下げそのまま闇の中に消えてし

また。

「マリア、父上を召喚した塔に行こう。」

「え？ あ、はい」

マリアとロシュは魔王を召喚したときに扱った塔の部屋へと行った。

「ロシュ様？ 何をなさるのですか？」

マリアが聞くと

「この国に大きな結界をはる。私の結界は魔王であつてもやぶる」とはできん。」

「え！ ？ 国を包むおつもりですか！ ？ そんな・・・ 体力がもちません！」

「私を誰だと思っているのだ？ 魔王の息子でありお前の夫だぞ？ 私を信じなさい。」

それを聞きマリアは安心したのか

「はい！ あなたを信じます！」

そう言いロシュに口づけをした。

「魔法陣発動！ この国に結界を張る！ 媒介は私魔界の王子の血だ。」
そう言い自分の親指の腹を噛む、するとそんなに大きな傷ではないのに指から血が流れ出る。

「闇に救う者達よ！ 我に従え！」

ロシュが叫ぶと黒い光の中から死神のような者達が姿を現し一瞬にして姿を消した。

魔法陣は消えた。

「ロシュ・・・ 様？」

「ああ、大丈夫だ。終わつたよ。これでザギネルの者がこの国に攻め入つても中に入ることもできないであろう。」

「ロシュ様ありがとうございます。」

「安心するのは早いぞ我が妻よ。これはただの結界だ、私がお前を妻にもらつと約束する前の約束は戦争を終わらせるー・・・ だつたはずだ。これから忙しく危なくなるだろう。私の警護の者を何人かそなにつけておく。」

その日の夜、城では結婚披露ということで舞踏会が行われた。
他の国の王にはロシュが何者なのかは伝えず隠し通そうと思っていた。

魔法を使ひ者

国のお抱えの演奏者が演奏を始め、各國の王・妃はワルツを踊り始めた。（但し、やはり隣国サギネル王国と、妃は舞踏会には参加してはいなかつた）

ロシュは肩膝を床に付き片手を上げマリアにダンスの誘いの合図をした。

マリアは微笑みながら手を差し出し差し出された手の上に自分の手を置いた。

ロシュは立ちあがりマリアの腰に手を回しもつ片方の手をマリアの手とつなぎワルツを踊りつとした。その時だ。

ガシャーーン！……！

ガラスの割れるよつた大きな音が鳴つた、それと同時に女性の悲鳴が鳴つた。

「一体なにごとだ！！！」

王カルオが大声を上げ現れた。舞踏会会場には各國の王、ロシュとマリア、そして黒装束の男が何人もいた。ざつと数えて8人だらうか。

「あの黒装束のを着た者の胸にあるマークは……サギネルか！？」

？」

王がそう叫びマリアの前までマリアを庇つよつて前に立つた。

「ロシュー…どういう事か説明を！」

魔王を呼び出した部屋でミルオン全体に結界を張つた後二人はその足で王のいる謁見の間まで行き王にそのことを伝えた。

「結界を張つたのではなかつたのか！…どういう事か説明しひ…」

「ち、父上！落ちついて下さい！」

王に落ちつくように言つたが王は落ちついている暇はなかつた

「説明は後でさせていただきます。今はまずお客様を安全な場所にお連れしてください。マリア、王について行くんだ。」

「ロ、ロシュ様はどうなさるのぉつもりですか！？」

「私はこの国をあのサギネルから守らなければならない！それがお前と結婚するための条件だつたからな。」

「え？」

マリアはロシュが言つた言葉に疑問を持つた。
(結婚するための)？

それではまるで嫌々の結婚といつよりロシュ本人が望んだ結婚のような・・・。

マリアがそう考へていると

「何をペラペラと話している？まあ構わないがな。今日は攻撃とうより交渉に来た。」

黒装束の男が一人前に出てロシュに片手を差し出した。

「なんのつもりだ？」

「我々と一緒に来ないか？あなたが誰なのかは理解しています。魔界の王子ロシュ・ゾーン様。我々と一緒にこの国ミルオンを我がものにしませんか？」

「はっ、戯言を！私はこの国の姫マリアと結婚し夫となつた。それを条件にこの国を救う約束をしたのだ、約束を違える気はない！！」
ロシュがそう叫ぶとロシュの後ろにいるマリアの背後から強い突風が通り黒装束の男の装束を切り刻んだ。

「さ、さすが魔王の息子だ。呪語も唱えずこのような強い風を操ることは・・・。やはり欲しいな、その力。」

「その力必ず我らの王にけんざんしてみせるぞ。こちらには協力者もいるしな、簡単に事は運べるだろ。」

「何？」

黒装束を纏つた男の後ろにいた他の黒装束の男の一人がそう言つた。

その言葉にロシュは反応したのを見て前にいた男が微笑んだ

「今はそれくらいにしておけ、そんなにペラペラと情報を簡単に話すんじゃない。」

「も、申し訳ありません！――！」

後ろの男の一人が怯えたように言った。そして

「マリア姫。」

前にいた黒装束の男がマリアに目をやつた。

「話に聞いていたよりも美しいな・・・。残念なことにあなたは結婚してしまったということだが、私はあなたを諦めたわけではない。あなたのような見目麗しい女性が魔物の手に落ちるのは見たくなりからな。必ずあなたを私の物にしてみせよお。」

その言葉にマリアは首を傾げた。それを見た男は黒装束のフードを外し髪を露わにした。

「かわいらしい動作だな。自己紹介だけしておこう。私はサギネル国第一王子ムール・ミラン。ミルオン国姫マリアよ。あなたは必ずや私の花嫁に迎えられる。

それまで待つていてくれたまえ。」

それだけを言い残しムール・ミラン率いる黒装束の男達は舞踏会会場から一瞬にして姿を消した。

話をただ黙つて聞いていたロシュは何故かムクレタ顔をしていた。

その後舞踏会は一端中断となり客達、各国の王、妃達は本国へ帰つて行つた。

その後、王はロシュを謁見の間に呼びだした。

「で、さきほどのはあははどういう事だ？」

玉座に座り玉座のある段の下に肩膝をつき頭を下げているロシュに王は問いかけた

「王、さきほどの黒装束の男達の話によりますと、どうやらサギネル国もミルオンと同じく悪魔を召喚した様子」

「そのような話聞いてはおらん！お主は父である魔王より力があるのではなかつたのか！そのお主の力を破ると言う事はお主は本気の力を出し切つてはいなかつたのではないか！」

「申し訳ありません。甘く見すぎておりました。私の力を最大限に使つた結果を張らせていただきます」

そう言つとロシユは後ろに向かひなりて、謁見の間に續く扉の前ではマリアがロシユの帰りを待つていた。

「ロシユ様！父上はなんて！？」

「なんでもないよ。心配かけてすまないね。……」「

「ロシユ様？」「

マリアが押し黙つてしまつたロシユの顔を下から除くように見ると、いきなりロシユに手首を掴まれそのまま誰もいない部屋へと連れて行かれた。

「口、ロシユや・・・ムグ！」

名前を呼ばぼうとしたマリアの唇を封じるよつてロシユの唇が重なる。「ん・・ふ・・・」

初夜以来夜必ずのよつてするよつなキスをされマリアは立つてゐるの精いっぱいになつてしまつていた。

「口・・・ロシユ・・・様・・・？」

「マリア、ムール・ミランといつ男は誰なんだ？お前のことを気に入つてゐるよつだつたが？」

「わか・・・りません。会つた覚えもない方でしたが・・・ん！」「

マリアが最後まで話終わる前にまたロシユの唇がマリアのそれに重なつた。

唇を重ねたままロシユの肩膝はマリアの足の間に入り膝の上にマリアを座らせるように片足を上げる。

「んつ・・・い・・・いけません！－ロシユ様－－このよつなところで！？」

「聞かない

まるで子供のような表情を見せそのまま片手をマリアの胸に添えドレスを下に下ろし尖りを転がして遊ぶ。

「んつんん・・・んつ・・・」

「何故声を殺す・・・？」（しても殺してられるかな？）

「ひつあ！－！ん・・・んつ－」

ロシユの手はそのままマリアのドレスをめくつ布を脱がし卑劣で守

られた穴の中に自分の指を埋めた。

「い・・・やあん！…！…ずる・・・い・・・ん！」

「何がずるいのかな？教えてほしいな」

ロシュはそう言つと卑劣の中に入れていた指をもつと奥まで入れ、抜いたり出したりを続け始める。

「あつ！…あ・・・ん・・・も・・・れ・・以上・・・」

マリアの言葉を聞き、ロシュはクスッと笑い

「これ以上・・・何？」

愛しい者を見つめるような目をマリアに見せ微笑みながら聞いた

「い・・・じ・・わる・・・」

「お前は本当に可愛いな・・・昔も・・・今も・・・

「え・・・？あ！…！」

ロシュは両手をマリアの太腿の裏に回し足を持ち上げ卑劣の中に自分の肉筒を押し込んだ。

「あつ！…ああん！…！…あつ！…い・・・ああ！…ん！…ん！…？」

ロシュはこきなりマリアの唇を自分の唇でふさいだ。

肉筒を出し入れしながら、自分の舌をマリアの中に出し入れする。

「んつ・・・ふつ・・・ん！…！…う・・・あ・・ん！…！」

「マリア・・・つ！…！」

「あ！…ああああ！…！…んつつ・・・」

マリアはそのまま氣を失つた。

魔法を使ひ者

「お前は可愛いよ、昔も今もね。」

マリアが気を失つ才前ロシュがそつとつたよつた氣がした。

「ん・・・・?・・・あら・・・何故私はベッドに・・・あ!」
ベッドから起きた後少し困惑したが何故自分がベッドにいるのかを
思いだし、さつきまで自分がどこでロシュとどんな事をしていたの
かを思い出し頬を染めた。

(私つたら氣を失つたものだからロシュ様が運んでくれたんだわ・・・
・あ・・・あんなところであんなことを・・・)

マリアはベッドから身体を起こしそのままベッドから降りよつとす
ると

「え・・・?か・・・からだが・・・つ!か・・ない?」

マリアの身体はそれ以上動こうとはしなかつた。すると突然どこからか
声がした

『ミルオン国第一王女マリア様であらせられますね?』

『だ、だれ!?え!/?』、声が・・・出ない!?

さつきまで出ていたはずの声までも奪われてしまつていて。

『申し訳ありません。騒がれてしまつては少々面倒な事になりかね
ないので声は奪わせてもらいました。ご了承ください。』

そう言つと寝室の隅の暗闇から黒装束の胸にはサギネル王国のマー
クが施されたバッジが飾られている男が足音を立てずに歩き姿を現
した。

『マリア様にお願いがあつてまいりました。』

黒装束の男はそう言つとマリアのベッドの傍に立ち

『我が王国。サギネル王国第一王子ムーン・ミラン様がマリア様を
ご所望ですでの私と一緒にサギネルまで来ています。申し訳

あつませんが拒否権は差し上げることはできませんので」「承ぐださい。』

男はそう言つとマリアの布団をはがし、寝着姿のマリアの背に片手を両足の膝の裏にも片方の手を通して抱き上げ小声で意味のわからぬい言葉を告げるとマリアの身体に急に眠気がおとされた。

その頃ロシュは魔王召喚の時使われた塔の部屋にいた。

「魔界に住みし古の精靈達よ我は魔界国第一王子ロシュ・ゾーン、今我の前に姿を現し我に従え。」

自分の手に剣で傷を付け血で床に魔法陣を書くとロシュは何やら言葉を話始めた。

ロシュが言葉を言い終わると同時に頭の上で光輝く物が出てきた
『ロシュ・ゾーン様、古の契約のためはせ参上いたしました。命令をどうぞ』

光の中から低い声が鳴り響き

「IJの國、ミルオン王国の周りに結界を張り他の者の侵入を許すな」
そう言つと「御意」とだけ告げ光は消えた。

部屋の隅でそれを見ている者がいた、ミルオン王国第一王子でマリアの兄のユリアスだった。

ユリアスはロシュがいつかミルオンを裏切りサギネルに付くだろうと決めつけ魔法を国にかけるところを見ていたのだった。

「今のはどのような魔法をかけたのだ」

ユリアスが聞くとロシュは後ろに踵を返しユリアスの方を見て言つた
「魔界に住み古くから私の一族に付き従つてゐる魔神を呼び出しこの国全体に結界を張らせました。結界と言つてもその結界は特別なものでその魔神自信が姿を変えて結界の姿に変形したものなのでもしも結界を破るような事があつたり、通り抜けされたりすることがあればすぐに私のところに知らせが来るようになっています。」
それを聞くなりユリアスは不機嫌そうな表情を緩める事なく何も言わず踵を返しその場を後にした。

「さて、そろそろマリアが目を覚ますな。王のところに来てマリアと赴く事にしよう」

10年前魔界の森を狩りと称して探索していた時、どこからか鳴き声が聞こえてきた事がある。俺は鳴き声を辿り森の奥に進んで行くと鳴き声が近くなつたところに人間界へ行くためのひずみが開いてしまつていた。それより少し歩いたところから鳴き声は聞こえていて俺は葉をじけ鳴き声のするところを除くとそこには一人の少女が座りこみ両手で顔を覆つて泣いていた。

俺の中で何かが一瞬ドキリと鳴つたがその時の俺はまだ幼くそれが恋とはわかつていなかつた。その少女の名は「マリア」人間界にあるミルオンという国の王女だと言う事がわかるとそのまま彼女の手を握りひずみまで連れて行つた。

ひずみの中に入り森がもうすぐで終わるといつところで俺はマリアの額に手をかざし魔界での記憶を全て奪い彼女の背を押し、そのまま姿を消した。それからの10年間の間俺は「あの時の少女は元気にしているだろうか?」「見たところかなりの泣き虫だったが、また迷子になつていらないだろうか?」「今頃何をしているのだろうか?」

と少女の事を考え時はなかつた。そんな俺を見て魔王は息子のためにとでも思つたのだろうちょうど召喚で呼び出しをされた時自分自身が赴く事を俺に告げ人間にあつさり召喚されやがつた。そして俺は良いと言つていないので勝手に条件なんか出しあがつた。

だが、そのおかげで俺はまたマリアに会えた。
もうマリアの悲しむ顔は見たくない。俺が絶対に彼女を守つてみせる。

そう決意しながらロシュは塔を後にしマリアの眠る寝室に向かつた。

その頃サギネル王国では

「ん・・・ここは・・・?」

私今まで何してたのかしら?えつと・・・ミルオンのベッドで目を

覚まして身体を起したらそれ以上身体が動かなくて……っ！？
マリアは自分が今どこにいて何があつたのか思い出し身体を起した。どうやら術は解け身体も動くし声も出るらしい。

「ここは一体……？誰の寝室なのかしら……？」

マリアが不思議がつて部屋の中をベッドの上から見渡していくとコンコン

部屋の扉をノックする音がしてマリアの身体はビクついた。するとマリアの返事を待たずに扉を開けたのは、舞踏会の日の夜マリアやロシュ・コルタンやコリアスの田の前に現れたムール・ミランだった。

「田が覚めたんだね。」

そう言いながら彼はベッドに近づきベッドの横に置いてある椅子に腰かけた。

「手荒な扱いをしてしまってすまないね。どうしても君と話がしたくて、部下に君をここに連れて来るように頼んだんだよ。」

「あなた様とお話することはあります。あなたの国と我が国ミルオンは敵対しているのですから何を話すと言つのですか？」

マリアがムール・ミランの言葉に即座に答える

「そんなに怒らないで。あなたにそんな顔似あいません。あなたにお願いがあるだけなのです。」

「お願ひ？」

対、ムール・ミランにされた問いかけに答えてしまつてマリアは即座に手を口にあてる

「ええ、あなたにはロシュ・ゾーン様と別れていいただきたいのです。そしてこの國に妃として来ていただきたい。もちろん私の正妻としてね。」

それを聞いたマリアは田を見開き口を動かし言葉を絞り出した。

「な、何を仰っているのかわかりかねます。私にロシュ様と別れて敵国に嫁げとおっしゃるのですか？」

マリアがそう聞くとムール・ミランは頷いた。

「はい。あなたの父、カルオ陛下は両国の戦争にけりをつけたか
たから魔王を召喚し、そして魔王から出された条件をのんだのでし
ょう？ならば、魔王に助けなどこわす両国の王子と王女が結婚すれ
ば一つの国は合体し今までより遙かに大きな物となりましよう。そ
れに、そつすれば戦争する理由もなくなるのでは？今すぐ戦争をや
めさせるにはそつするしかないと思うのですが」

確かにそうだけど・・・

だが、マリアには答えを考える理由はなかつた。

「申し訳ありませんが。そのお話を断りさせていただきます。」

「！？な、何故です！？」

ムール・リランは驚いたようにマリアに聞き返した。

「私はもう既にロシュ様の妻、そしてこの戦争をロシュ様は終わら
せてくれると約束してくださいました。私はロシュ様のそのお言葉
を信じたいのです。それに・・・」

マリアはそこで言葉を止めると瞳を閉じて続きを話した。

「それに、何故かロシュ様とは初めてお会いした気がしないのです。
昔・・・幼い時に会った事があるような・・・そんな気がするので
す。もしその記憶が本物ならあの方は悪魔などではありません。と
ても清んだ美しい心の持ち主だと、私は思います。なので、このお
話を受けできません。申し訳ありません。ムール様」

マリアはそう言つとベッドの上から頭だけ下に下げて礼をした。

「そうですか・・・それでは最後に会つてほしい方がいるんです。
「会つてほしい方？」

マリアがそう聞き返すとムールは顎き扉の方を見た。

「どうぞ」

ムールがそう言つと同時に扉が開いた。そこに立っていたのは外見
がとてもロシュとそつくりな青年だった。

青年は扉を閉めてから扉の前で一礼をしてからベッドに近づいてき
た。

「マリア様、この方に見覚えは？」

「ロシュ・・・様に、似ていらっしゃいますね」

マリアがそう言つと青年は頷き

「はじめて。私の名はウイリアム・ゾーンと言います。外見が似ているのは私が彼の従兄弟だからでしょう。魔力はロシュの方がはるかに上ですが年は彼より上です。」

「ロシュ様の従兄弟が何故このよつたにいらっしゃるのですか？」

マリアがそう言つと何故かウイリアムの横にいたムールが質問に答えた。

「我が國もミルオンと同じく召喚を行つたからですよ。魔力はロシュ様の方が上かもしませんが、こちらにはウイリアム様とあなたがいます。この国は元々魔法の国ですし魔力の違いなどどにでもなります。それに、あなたをおとにすればロシュ様はこちらの要求には逆らえないのでしょうしね。」

ムールのその言葉を聞きマリアはムールの方を睨むよつとして見つめた。

「どうこう意味ですか？私をおとしたりしてもロシュ様はこの国の言う事を聞く事は絶対にありえません。」

「ほお？ それは何故です？」

「ロシュ様は・・・私を愛していないからです。元々この結婚は魔王様が我が國ミルオンを守つてくれるための条件だったからなのです。なので、ロシュ様は私を助けには来ません。」

マリアがそう言つとウイリアムが瞳を閉じ

「マリア様。あなたはどうやらロシュ様と会つたのは結婚式当日がはじめてだとお思いのようですね。申し訳ありませんが、初めてではありませんよ。」

ウイリアムのその言葉を聞きマリアは目を見開いた。

「え・・・？」

「10年前、あなたは魔界に行かれた事があるのですよ。あの時ロシュ様と私は森で狩りをしていました。その時どこからか泣き声が

してきたのですよ。ロシュは一人で泣き声の元を探すと森の奥へ入つて行きましたが私は心配だつたので隠れて後を付いていつたんですよ。そして、ロシュを見つけた時傍には一人の少女がいたんですね。名は「マリア」と名乗つてましたね。あなたの事ですかね？ロシュはその後あなたを人間界に帰したあなたの魔界での記憶を消して森から出していましたよ。」

「・・それでは・・それでは・・あの時の少年はロシュ様だとでもおっしゃるのでですか・・・？」

驚きを隠せない表情でウイリアムに問う

「ほう・・・記憶を消す魔法はどうやら失敗していたようですね。あなたのの中にはロシュ様と会つた時の記憶がまだあると？まあ、それで結婚につながったのかは知りませんがね。」

マリアはその言葉を聞き手を口元に運んだ。

あの時の少年がロシュ様・・・それなら・・・私の初恋の相手は・・・！？口、ロシュ様つて事！？

マリアが驚いた状態でいるとムールが話しかけてきた。

「よくわかりませんが。お話は終わりましたか？まあ、そういうことですのであなたにはしばらくこの城に滞在していただきます。そしてウイリアム様がロシュ様を抹殺した後、私とあなたの結婚式をあげましょ。」

ムールはそう言うとマリアの答えを聞かずウイリアムの方を向き何も言わないまま頷いた。すると、ウイリアムはマリアの枕元までやつてきてはマリアの額に手を当て何やら呪文のような物を小声で唱えた。すると、マリアの視界が段々暗くなりそのまま後ろに倒れてしまつた。

口・・・シユ・・・わま・・・

その頃ミルオン城ではマリアが消えた事に侍女達は慌ただしくしていた。

「マリアが消えたとはどういうことだ！！！」

そう叫んだのはコルタンではなくユリアスだった。

「まだわかりません。1～2時間ほどマリアの傍を離れていましたらマリアが部屋から消えていました。侍女達に城の中を探させましたがどこにもいなく、国全体を魔力で探しましたが。マリアの気配がどこにも見当たりませんでした。もしかすると、結界を張る前にサギネル國の者に誘拐されたのかかもしれません。」

「「されたのかもしれません」では解決したうちには入らないのだぞ！！自分の妻一人守れぬ男が国1つ守れるのか！！」

ロシュの後に叫んだのもまたユリウスだった。ユリウスは両手を握りしめながら立ちあがりロシュを睨みつけていた。

「申し訳ありませんが、今は言い争いをしている時間はありません。早く・・・早くマリアを助けなくてはなりません。それでは私はこれで。」

ロシュはそう言うと席を立ち踵を返し扉から部屋を出て行った。

「父上・・・お願いがあります・・・」

ロシュが出て行つた方を見つめたままユリウスは後ろの席に座つているコルタンに問いかけた。

カツ、コツ、カツ、コツ

暗い廊下をムールとウイリアムが歩いていた。

今しがたマリアに催眠術をかけてきたところだ。

「これで良かつたのですか？ムール様

「何がですか？ウイリアム様」

ムールはウイリアムの問いに応えるべくその場で立ち止まり後ろを振り返った。

「今は催眠術で寝かせている状態ですが。あなたはさつき仰っていましたね、「ロシュを抹殺してマリアと結婚する」と、ですが私が見たところマリア様はロシュを抹殺しても悲しみが増えるだけであなた様とは結婚しないと思われるのですが・・・もし、結婚するごとがお望みなら私がマリア様の部屋へ戻りロシュ様でも解けぬ魔法がひとつありますのでそれをおかけしましょうか」

「ロシュ・ゾーンでも解けぬ魔法?」

「はい。人の心を闇が蝕み術をかけた者の意のままに操る事ができる魔法、その魔法をかけマリア様をミルオンに返しマリア様の口からロシュに別れを告げさせ、その後マリア様にかけた魔法を解けばロシュは自分を嫌いになつて城を出て行かれたのだと勘違いしてロシュの別れを受け入れるのではないでしょうか。ロシュ抹殺はその後でも良いのでは?」

それを聞いたムールは一瞬目を見開いたがすぐに下を向きフフっと笑い。

「さすがは私が召喚した悪魔だな、あの魔王の息子より悪魔に近しい存在だ。」

「お褒めにいただき誠にありがとうございます。」

ウイリアムはそう言い胸に片手を当てムールに礼をした。

そしてその場を後にし、今まで歩いてきた廊下をまた戻つて行つた。

マリアはその頃ベッドで眠つていた。

(・・・リア?マ・・・ア?マリア?どこだ!?)

(誰かが私を探してる・・・?誰?あなたは・・・誰なの?)

(マリア・・・どこにいるんだ・・・。俺のマリア・・・幼い頃守ると決めた幼い姫君・・・マリア・・・どこにいるんだ!?)お願いだ・・・返事をしてくれ!マリア!)

(私は・・・ここよ。私はここにいる。はやく・・・助けにきて・・

・ロ・・・シユ・・・様・・・

マリアがロシユに手を伸ばそうとしたら目が覚めた。
「おはようございます。マリア様・・・と言つても、先ほどあなたを寝かしてからあまり時間はたっていないので今はまだ夜ですけどね。」

「・・・何かまだ御用があありますですか?」

マリアの問いに答えずウイリアムは何か呪文を唱えた。すると紅い光が飛び散り、ウイリアムの手には杖が現れた。

「・・・何をなさるおつもりですか・・・」

ウイリアムが杖を出したところを見て何か魔法を唱える事を悟ったマリアはウイリアムを睨みつけた。

それでもやはりマリアの質問には答えず、ウイリアムはマリアの額に指をあてた。するとマリアの身体が金縛りにあつたように動かなくなってしまった。

そして杖を掲げ呪文を唱え始めた。

その後マリアの田の前は真っ暗になりまた眠りについた。

「・・・さて、どう出る?ロシユ」

その頃ミルオンでは、魔王召喚に使つた塔の部屋でロシユは床に魔法陣を描き呪文を唱えていた。それは前に魔術師達が魔王召喚に扱つた呪文だった。

ロシユが呪文を唱え終えると黒い煙が現れ、煙が消えたらその中にはロシユとともに外見のそつくりな年齢は20代前半ほどの男性がそこに立っていた。

『どうした?ロシユ。』

「父上、最近魔族で誰か行方不明になつてはいませんか?」

『行方不明?・・・ああ、ウイリアムが突如姿が消えたという話は聞いたな。だがあやつはお前の1つ下にあたるほどの魔力を持つ者探索なんかせずとも勝手に自分から帰つてくるだろ?と公にはしてはいないのだが?』

「ウイリアムが・・・

『どうかしたのか?』

顎に手を当て考えこんだ息子を見て心配した魔王は王子の前まで歩み寄り質問した。

「・・・どうやら敵国のサギネルも悪魔召喚を行ったようなのです。そして・・・、そして、マリアが何者かに誘拐されました。」

『なんとー? まことか! ? 探したのか?』

「いえ、まだです。しかし田星は付いているので・・・

『・・・ロシュよ。これを

そう言い魔王が手を前に差し出すと手の上が紅く輝きその中には一つの小さい瓶があつた、その中には赤い液が入っていた。

「・・・これは?」

『何か困ったことがあれば使いなさい。必ず助けてくれるはずだか

ら』

そう言い魔王は姿を消した。

ロシュはその瓶を握りしめ部屋を出て行こうとしたら

「ロシュ様! ! !

ロシュ付きの従者が慌ただしく部屋に入ってきた

「どうした。騒々しい。」

「も、申し訳ありません。で、ですが! マ、マリア様が! マリア様

が帰つていらっしゃいました! ! !

従者の言葉を聞き、いてもたつてもいられなくなつたロシュはその場を後にし走つて謁見の間まで行つた。

バーン! ! ! !

大きな音をたて謁見の間の扉が開けられた。

「マリア! ! !

謁見の間、王座の前には一人の少女が床に膝を付き王に頭を下げていた。

ロシュの言葉に反応した少女は立ちあがり後ろを振り返つた。その

少女はマリアだった。

「ご心配おかけして申し訳ありませんでした。ロシュ様。ただ

今戻りました。」

マリアはそう言い微笑んだ。

ロシュがマリアに駆け寄り抱きしめようとすると

「マリア！！！無事だったのだなマリア！！！」

ロシュよつ先にコリアスがマリアを抱きしめた。

魔法を使ひ者

「兄上もただ今帰りました。心配おかけしてもうしわけありませんでした」

マリアは兄の腕に抱かれたまま兄の顔を見て微笑んだ。

行き場をなくしたロシュの手は肩手は下ろし、片手は口元に運ばれコホンと一つ咳をした。

「して、マリア？今までどこに行っていたんだ？」

ユリウスとマリアとの話を聞いていたコルタンが話しかけた。

「はい。サギネル王国第一王子ムーン・ミラン様と自らの足でサギネル王国まで行つていました。」

「な、なんと！？何故お前がサギネルに行くのだ！」

「話があるだけだと言われたもので。父上、私からもお話があります。」

「な、なんだ？」

「・・・」

マリアはしばらく目を閉じて下を向いていた。

「父上、ロシュ・ゾーン様との結婚なかつたことにさせさせていただきたいのです。」

「！！？」その言葉を聞いた謁見の間にいた者達全員が驚きの声をあげた。

「ま、マリア！？どういうことだ！？」

一番最初にマリアに問い合わせたのはロシュだった。

「どうせこりうも、魔王召喚自体をなかつたことにしていただきたいのです。」

「自分が言つている事がどういう事かわかつておるのか！？」

次に問い合わせたのはコルタンだった。

「わかつております。私はムール・ミラン様を結婚致します。」

「何！？」

「この結婚は戦争をなくすためというもの、でしたら私とサギネルのムール様が結婚すれば国は合体する事になるでしょう。そうすれば戦争がなくなるだけでなく国が合体しあらに大きな物になるかと思われるのですが?」

「……むう……」

コルタン王は玉座に座り考えこんでしまった。

「マリア……」

「申し訳ありません。ロシュ様。ですが、私決めたんです。あなたと別れてムール様と結婚します。」

マリアは微笑みながらロシュにやう言つた……が、その瞳に光はなかつた。

瞳に光がないことに築いたロシュは少し怒つたような顔をした。ロシュはそのまま目を閉じた。

『ここには……どこ? 暗い……怖いよお……ロシュ様……あれ? ロシュ……って誰だつけ? え? わたし……も誰? 怖い……私は誰? ここはどこ? 怖いよ……怖いよ……』

『……リア……マ……リア……マリア』

『誰かの声……誰? マリアって?』

『私の名はロシュ。魔界国第一王子ロシュ・ゾーンだ。マリア、私がわからないのか?』

『口……シユ? 魔界国? わ……わからない! わからないの!!!!』

少女はそのまま手を顔にあて泣きだした。

『マリア……泣くな。泣かないでくれ。私はお前の泣き顔なんか見たくない……。私は……私は、お前の笑顔が見たいんだ』

そう言いロシュはマリアを抱きしめた。

『(どうして)だろう……この人の胸の中は暖かくて……とても懐かしい……私……この人を知つて……る? 昔……会つた事がある……あれは……いつ? そうだ……私がまだ……小さい時……森で迷子になつて、助けてくれた男の子も私の事抱きしめてくれた。あの子と同じ感じがする……』

すると、突然ロシュの腕の中のマリアから光が放出された。
そして現実世界のマリアとロシュは気を失って倒れた。

「マ、マリア！？」

「な、何事だ！」

何が起きたのかわかつていなかったコルタンとユリアスは茫然するばかりだった。

その後、ロシュとマリアは寝台に運ばれた。

「・・・う・・・・」

最初に目を覚ましたのはロシュだった。枕元にはユリアスがいた。
ユリアスは開口一番に

「貴様マリアに何をした？」

と言った。

ロシュは横になつた状態のまま

「操られて居る状態だったためマリアの心を救つただけです」と答えた。

「操られていただと？」

「はい」

「・・・詳しく話せ」

「魔王に聞いたところ私の従兄弟が行方不明になつておりまして。
おそらくサギネル王国も悪魔召喚を行い私の従兄弟を呼んだのかと、
そしてマリアを誘拐してあつさり返すと言う事は相手国は私が一番
苦手としてて従兄弟が得意としてる魔法をマリアにかけると思った
のです」

「それが人を操る魔法なのか？だが、お前は苦手なのだろう？それ
ならばどうやつて助けたと言うんだ」

ユリアスは怒つた表情をかえることなく聞いた

「確かに苦手ではあります。この魔法を解くための魔法は知りませ
ん。何故ならその魔法を解くための魔法は相手の心を壊して救うと
いう手段しかないからです。なので私は彼女の心に入り込み、心自
信に話しかけてみたのです。そして、成功しました。」

「で、では！？」

それを聞いたユリアスはやつと表情を緩めた。

「はい。元のマリアに戻り、心も壊れていません。今までどおりのマリアです。」

「そ、そ、うか・・・そ、うか・・・あ、り・・・が・・・ヒ、ア、リ、ガ、ト、う、ロ、シ、ユ。我、が、愛、す、る、妹、を、救、つ、て、く、れ、て、感、謝、す、る、・・・」

ユリアスはそう言つとロシユの手を掴み頭を下げた。

「我、が、妻、を、救、つ、た、ま、で、の、こ、と。お、気、に、な、さ、ら、ず。マ、リ、ア、の、ヒ、リ、ク、行、つ、て、あ、げ、て、く、だ、さ、い。」

ユリアスはロシユの手を離し部屋を後にした。

部屋にはロシユただ一人になつた。

「そ、こ、に、い、る、の、だ、ろ、う、？、わ、か、つ、て、い、る、ん、だ、ぞ、結、界、に、穴、が、開、いた、か、ら、な、」

ロシユがそう言つと寝台前の何もない空間からロシユと外見がそつくりな男性が姿を見せた。ウイリアムだつた。

「・・・やは、り、人、間、界、に、い、た、の、だ、な、ウ、イ、リ、ア、ム。」

「あ、あ、だ、つ、て、魔、界、を、継、ぐ、者、で、ある、お、前、が、人、間、の、少、女、に、恋、を、し、た、と、聞、い、た、か、ら、ね。ど、ん、な、女、か、確、か、め、て、み、た、か、つ、た、だ、よ。でも、ま、あ、・・・ク、ス、・・・お、前、趣、味、か、わ、つ、た、な。昔、は、も、つ、と、柄、の、い、い、彼、女、ば、つ、か、周、り、に、歩、か、せ、て、い、た、の、に。今、で、は、あ、ん、な、餓、鬼、つ、ぽ、い、し、す、ぐ、泣、く、し、め、ん、ど、そ、う、だ。昔、の、お、前、の、趣、味、の、が、俺、は、好、き、だ、つ、た、よ。」

「お、前、に、は、関、係、の、な、い、話、だ、ろ、う。そ、れ、に、マ、リ、ア、の、良、い、と、こ、ろ、は、私、や、マ、リ、ア、の、家、族、が、十、分、な、ほ、ど、に、知、つ、て、い、る。」

「関、係、な、く、も、な、い、だ、ろ、う、？、お、前、も、私、も、次、期、魔、王、候、補、な、の、だ、か、ら、な。將、来、魔、王、に、な、る、も、の、が、人、間、の、女、に、恋、な、ど、考、え、ら、れ、な、い、事、な、ん、だ、ぞ、」

ウイリアムは腕組みをしながらそう言つた。

「ウ、イ、リ、ア、ム、マ、リ、ア、に、魔、法、を、か、け、た、の、は、お、前、だ、な、？」

「ん、～、なん、で、そ、う、思、う、ん、だ、？」

「私の苦手としている魔法を知っているのは俺の従兄弟で幼馴染であるお前が現魔王だけだ。」

「 そ う だ っ け ー ？ ま あ 、 も し そ う だ と し て も 僕 に は 関 係 な い ね 。 」

「 私 の 妻 に 魔 法 を か け た の だ ぞ ？ 関 係 な い わ け が な い だ ろ う 。 」

「 僕 が か け た 魔 法 は 確 か に 心 を 操 るも の の だ が 、 あ の 魔 法 は 心 に 憶 み な ど を 持 つ て い る 者 に し か か から な い 、 つ て こ と は あ の 女 は 何 か し ら の 憶 み や 間 が 心 の 中 に あ つ て こ と だ ぞ ？ そ の 憶 み 、 お 前 に は わ か つ て い る ん じ ゃ な い の か ？ ロ シ ポ 」

「 ． ． ． ． ． 」

ウ イ リ ア ム の 言 葉 に ロ シ ポ は 黙 つ て し ま つ た 。

（わかつてゐるさ。わかつてゐるとも。マリアは無理やり私と結婚させられただけだ。俺には・・・あの時の記憶もあり俺一人だけの一目惚れだつたんだ。それなのにその自分の好きになつた女を無理やりに自分の物にしてしまつた。マリアは・・・さぞや悲しんだだろう。きっと好きな男だつていたはずだ。それに、私は魔王の息子で魔界の王子だ。人間のマリアが私を怖がらないはずがない・・・）
「わかつて・・・いるみたいだな。つてことわだ。彼女が操られて言つた言葉は本音つてことだぞ？お前はあそこまで言われても彼女を手放さないつもりなのか？それで彼女が幸せになれるとでも？」
ウイリアムはロシュに詰め寄つた。

ロシュは下を向き悲しそうな表情を見せていた。

「お前なら条件をなくして彼女を自由にできるはずだ。彼女の幸せを思うなら彼女から手を引け。」

ウイリアムはわざと心配しているという表情を作りロシュを見つめた。

「・・・俺は・・・・・・」

「う・・・・・ん」

「マリア？マリア！私がわかるか！？マリア！」

「あ・・・にう・・・え？」

その頃ちょうどマリアが目を覚ました。

「ああ、私だ。コリアスだよ。マリア。良かつた。無事目を覚ましてくれたのだな。どこか痛いところはないか？気分は悪くないか？」
コリアスに色々質問されまだ完全ではない頭を働かせ問題がない事を確かめた。

「大丈夫です、兄上。あの・・・私は今まで何を？？」

「覚えていないのか？」

「はい・・・。サギネル王国の一室にある寝台の上で氣を失つてから記憶がなくて・・・どうして今ここのいるのかさえ・・・」「さうか、そうか。いいんだ。無理に想に出さなくていい。お前が無事だつたならそれだけで・・・」

ユリアスはマリアに優しく微笑んで見せた。そしてマリアをそつと自分の胸の中に入れ抱きしめた。

マリアは記憶がなくともユリアスのこの状態で自分がユリアスにても心配をかけてしまったことに築きユリアスの腕を避けずそっと瞳を開じユリアスの胸の中へと収まつた。

しばらくしてユリアスが腕の力を緩めるとマリアは瞳を開けた

「あの・・・兄上?」

「どうした?」

「ロ・・・ロシュ様は・・・ビニにて?」

「・・・寝室にいるよ。」

「や、そうですか。」

そう言ひマリアは寝台から降りよつとした

「もう動いて平気なのか?」

ユリアスが心配そうにマリアの両肩に手を添えてくる。

「いっぱい寝ましたから。平氣です。」

マリアは心配させまいと笑顔でそつ語つた。

それを見たユリアスはホッとしたよつてマリアの寝台から離れた。

マリアは寝台から降り立ちあがると

「あの、兄上。私、ロシュ様のところへ行つてまいります。」

「行つてらっしゃい。無理はするなよ?」

「はい!」

マリアは微笑みながら返事を返し、ユリアスに一礼すると部屋を出て行つた。

(眠つてからの記憶はないけど・・・その前のものならある・・・)

ウェーリアム様は確かに言つたわ。ロシュ様はあの時の男の子だと。

もしそれが本当ならロシュ様は・・・

そつ心の中で呟いてマリアは足を止めた

「ううん・・・。ロシュ様が誰であっても関係ないわ。私はロシュ様が好き。それだけはまぎれもない事実よ」

そつ言いながら胸の前まで腕を上げ手をグッと握った。

コンコン

ロシュの部屋内にノック音が響き渡った。

しばらくして「はい」という声が聞こえマリアは扉を開けた。すると、ベッドで身体を起こしているロシュを見つけたマリアは驚いた表情で寝台に駆け寄った

「ロ、ロシュ様！？どこかお悪いのですか！？何かの御病気ですか！？」

そう聞いてくるマリアをロシュは見やつた後

「いや、大丈夫だ。少し立ち直りみをしてな。もうすっかり元気だ。

それを聞くなりマリアはホッとしたように胸にあてていた手を撫でおろした。

「あ、あのロシュ様・・・」

「マリア」

「は、はい・」

質問しようとしたマリアの言葉をロシュの声が遮った。ロシュは真剣なまなざしをマリアに向けていた。

「悪いのだが・・・別れよつ

「え・・・・・・」

「条件を無しにじょうと言つているんだ。そのかわり、召喚されたのに違ひはないからな責任を持つてこの国は守りさせてもらひ。構わないか？」

「な、なぜ、そのような事をいきなり仰るのですか・・・？」

マリアは同様を隠せないままに聞いた。

「別に理由などない。疲れてしまったのだ。遊び半分で人間と結婚

してみようと思つたが、人間はめんどうな生き物だ。魔法も使えないし、心も弱い。そんな者達と一緒にいてもいいことがないとわかつたんだ。・・・・つ！」

そう言いながらマリアの方を見ると、マリアの瞳からは涙が流れていた。

「そ、そういうことだ。だから私は魔界に帰らせてもうつ。この国には結界を張つてある。私が生きているかぎりサギネルの者はだれ一人この国には入れないだろ。それでは、さようなら」

そう言い残しロシュは姿を消してどこかへ行つてしまつた。

マコアはベッドに頭を伏せ声にならない泣き声を出した。

マリアの帰りが遅い事に心配したユリアスはロシュの部屋へと向かっていた。すると、暗闇の中からマリアが歩いてくるのが見えてユリアスはマリアに駆け寄った。そして目にした物を見て安堵した。マリアの頬には泣きじやくつた後で真つ赤に腫れあがり、瞳には一寸の光も存在してはいなかつたからだ。

の中で抱きしめた。

(「アラカル」)

ロシュは魔界城に帰つてきていた。帰つてきている事に案じた魔王

「お前がここにいることねもしゃ、マリア姫も魔界ここにいるのか

?

「父上、マリアとの結婚なかつたことにさせていただきます。」
「……なぜだ？ 望んでいたのではないのか？」

「…………なぜだ？ 望んでいたのではないのか？」

ロシュは魔界城の謁見の間、玉座の置いてある段の下で肩膝を付き頭を下げ王に「マリアとの結婚なかつたことにさせていただけないか」とこつべを垂れていた。

「私は・・・父上のお察しのとおりマリアが好きでした。
「であるつ? だからわしは召喚されたことを良い事にあらうの王に

結婚という条件を出したのだぞ?」

「はい。ですが、それではマリアの意思はどうなるのでしょうか?
『条件』などとこつものために魔界の人間に嫁がされるマリアの
意思是・・・」

「・・・・・」

魔王はロシュの言葉を聞くなり押し黙ってしまった。

ロシュは何も言わない魔王を背にして謁見の間を出て行った。
(これでいいのだ・・・)これで・・・)

自分にそつ言い聞かせていた。

「マリアの調子はどうだ?」

謁見の間にある玉座に腰をおろしていたカルオは心配そうにロール
に聞いた。

「はい・・・何も食べたくないだけ仰つてお部屋に籠つておられ
ます・・・」

ロールは心配していた。姫が幼い時から傍にはいたがこのような事
初めてで困りはててしまっていた。

「ロシュ様は見つかつたか? ユリアスよ」

ロールの横には同じく肩膝をつき頭を下げているユリアスがいた
「それが・・・城の中だけでなく町の中も探しましたがどこにもい
ませんでした・・・。あいつ・・・マリアに一体何をした! !
! !」

ドカツ! ! !とユリアスは床を殴りつけた。

するとユリアスの前、何もない空間から光が溢れだし、その中から
魔王が姿を現した。

「ミルオン王国国王カルオよ。話があつてまいった」

「魔王様！ロシュ様が消えてしまわれてしまいました！もしや、この国は救う価値がないということですか！？」

カルオは立ちあがり魔王に聞いた

「いや、この国にはいまだに息子、ロシュの結界がかけられております。話というのはロシュとマリア姫の事についてです」

「姫の？」

「ええ、このたび、私がそちらに差し出した条件を無にして一人の結婚をなかつたことにさせていただきたい」

「――！？？」

その場にいた。カルオ・ユリアス・ロールがそろつて驚いた。

「我が息子。ロシュは・・・とても優しい子なのです。時期魔王候補でありながらに自分の事より相手の事を思つてしまつほどに・・・。ロシュは、マリア姫を『条件』という言葉だけでしばりつけてしまつのはあんまりだと言いました。一人の人間の幸せも守れないのでは一人の妻の『夫』になることはできないと・・・なんとも馬鹿げた事を言い出しました。」

「・・・・そ、それでは。この国と隣国サギネル国との長き戦いを終わらせるにはどうすればよいのですか？？結界を張つているだけでは戦いが終わつたとは言えません。それではあくまでこの『国と城』を守つてはいるだけです。国の周りにある自然は罪もないし守る事はできません。」

「聞いたところによれば、サギネルにもマリア姫と年の近い王子がいらっしゃるそうです。」

「・・・それ・・・が？」

「サギネル国第一王子との國の姫を結婚させれば国は合体し今まで以上に素晴らしい物となりましょう。それに、その方がマリア姫も幸せかと・・・」

言いきる前に魔王の元に剣が飛んできた。魔王は何もないようにヒラリと剣を避け飛んできた方を見やるとそこにはユリアスがいた。

「ユ、ユリアス！な、なんということをするんだ！」おおむねおられたのが誰なのかな知らないわけではないだろ？」

カルオは驚き目を見開いたまま玉座のある段から降りてきた。

「わかつております。わかつておりますが・・・魔王の言葉を聞いていたら怒りを抑えきれず・・・」

「何か意見があるのなら聞こいづ。」

魔王はそう言った。

「あなたま今、マリアにはマリアの意思があると言いましたね？」

「ああ」

「でしたら、何故マリアは今部屋に籠りこの2日間何も飲まず食わずなのですか？それに私がマリアの帰りが遅い事を案じてロシュ様の部屋へと迎えに行つた時マリアは瞳から光を失い声までも失ったような状態でした。そして頬には涙の後があつたのですよ？私は・・・・・マリアがまだ幼い時約束しました。『何があつても守る』と。あの子はその約束をしてから私や父上に心配させまいと毎日笑顔を絶やさず見せてきました。そのマリアが今ではあるような状態なのですよ？私には・・・・マリアはロシュ様の事が嫌いだったようには思えないのです・・・・」

「・・・・・」

魔王とカルオは黙つてしまつた。

最初に口を開いたのは魔王だつた。

「それでも申し訳ないが、私にとつての一番は息子なのだ。あなたには悪いがロシュの事は諦めてください」

そう言い魔王は一礼をしてきた時のような光の中へと戻つて行つた。

魔法を使ひ者

「それで? ミルオンは今どうなつてゐるのですか? ウィリアム様」
その頃サギネルにある一室ムール・ミランの部屋ではウィリアムと
ムールが一人で話をしていた。

「はい。私がマリア姫にかけた魔法はロシコの手によつて解かれて
しまいましたが、それにいち早く気付いた私は即座にロシコの元へ
と赴きマリア姫の悩みを全て伝えてまいりました。あの調子ですと
ロシコの方から別れを告げるでしょう。今頃は別れを告げ終わつて
いる頃合いかと」

胸に手をあて一礼した状態でウイリアムの畳の前の椅子に腰かけて
いるムールにそう告げた。

「では、私と姫の結婚はもう決まつたようなものだな。早馬でミル
オンへ文を出せ。明日ミルオンへ行く!」

「かしこまりました。」

そう言つとウイリアムは侍女を呼びに部屋を出て行つた。

その頃マリアは。

コン、コン

静まりかえつたマリアの部屋内にノック音が響き渡る。

マリアは布団の中からモゾモゾと顔だけを出し「どうぞ」とノック
に応えた。

マリアの声の後扉が開き、そこにて立つてゐたのはマリアの兄コリア
スだつた。

「マリア・・・調子はどうだ?」

コリアスはコツ、コツと足音をたててマリアの寝台傍までやつてきて
た。

マリアは無言のままコリアスを見上げた。

「・・・・父上や母上、それにロール達が心配していたぞ？何か口に入れなければ熱もいつか出てくるだろ？」

ユリアスはそう言いながら寝台横にある椅子に座る。

それでもマリアは顔を枕に埋めたままで何も言わなかつた。

「マリア・・・。」

ユリアスは少し不安そうな、そつであつて少し考へているような表情でマリアの名を呼び決意したよつて話を切り出した。

「マリア。城を出よう。私と一緒に

「・・・・・え？」

それを聞いたマリアはやつと枕から顔を上げユリアスの言葉を聞き返した。

「今さつきサギネルから早馬で文が届いた。そこには“明日ミルオンへマリア姫に結婚を申込に参ります”と書いてあつた。」

「つづ！？」

それを聞いたマリアはベッドから勢いついて起き上つた。

「父上には前々から話をしてあつた。もし、ロシュがお前やこの国を裏切るよつな事がありお前が悲しい目にあつような事があるならば私がお前を連れて城を出てお前を守つて生きて行く。・・・そう父上にお願いした。私は・・・もうお前が嫌いな人間と国のためと言つて結婚することを見たくはないのだ。それにサギネルは敵国だ。何があつてもお前をあちらに渡す気は父上や母上、國の者たちにもない。」

ユリアスはそう言つと頭の中で過去の事を思ひ出していた。

(フ話)『父上・・・・お願いがあります・・・・』

『なんだ？改まつてお願ひなど、めずらしいな。』

カルオは苦笑じみた表情をユリアスに見せた。

『父上は、マリアが行方不明になつたことを覚えておられますか？』

『忘れるわけがなかろう？あの時はわしもお前も一緒に城の外にマリアを探しに行つたのだからな。サリナも今にも泣きそうな顔で心配していたしな』

ヨリウスは頷くよつに目を閉じ俯いた。

『私は、泣いているマリアを見つけた時約束しました。『何があつても必ず守る』と。』

カルオはヨリアスの話を黙つて聞いていた。

『マリアは・・・自らの意思でこの国のために嫌な者と結婚しました。私は、今は好きではなくてもこれから未来・・・ロシュ様もマリアを好きになりマリアも・・・ロシュ様を好きになりました。マリアが幸せになつてくれるのならそれでも構わないと思いました。それが、マリアの願いだつたからです。ですが、もしロシュ様がこの国やマリアを裏切るような事があれば私はロシュを許しません。そして、もう一度とマリアを悲しませないよう、マリア自信が何と言おうと私がマリアをこの国から連れ出し幸せにしたいと思います。』

ヨリアスは目を開けまつすぐとカルオを見つめ言つた。

『ですから、もし。その時が来たら。私とマリアが国を出ることをお許しください。』

『マリアは・・・良い兄を持つて幸せだな』

カルオは今にも泣きそうな顔でそう言つた。そして、

『よからう。その時が来たら・・・ヨリアスよ。マリアをよろしく頼むぞ。お前達が逃げるための後ろ盾は私に任せなさい。』

『ありがとうございます。父上』

「そんな事!」

マリアの声ではつとして現実に戻つてきたヨリアスはマリアの方を見た。

「そんな事勝手に決めないでくださいー以前、お断りしたはずです！私は・・・ロシュ様の妻です。別れる気などありません・・・。」

「悪いが、既に城を出る準備は整つている。あの時はお前がこの結婚で幸せになるのなら・・・と諦めたが、今はもう話が違う。それに別れる気がないと言つても、ロシュは魔界に帰つてしまつたぞ？」

もう一度ここには帰つてこないだらう。自分から別れを切り出しだのだからな」

「兄上は・・・何故そこまでして私を大切にしてくださるのですか?
?小さい頃に交わした約束のために・・・」

マリアはベッドの上に座り込んだままコリアスに聞くと、いつからあつたのか寝横にある机にある杯の中に入つて、ある物を何も言わ

ず口に含んだコリウスはマリアの両頬を血りの手でなぞり口づけをした。

— ? — ! —

ドンドン！とユリアスの胸をマリアは叩くがユリアスは唇を放そうとはしなかった。そして冷たい液体がマリアの口の中へと流し込まれた。マリアがそれを飲み込むとユリアスは唇を放し囁いた。

お前を愛しているからたゞ少しでござなく

最後まで聞き取れなかつた。マリアがそのまま深い眠りについてしまつたからだ。

その頃魔界では。

「ミルオン王には結婚の事話しておいたぞ。」

「あいかわいわします」

謁見の間にロシュを呼びだした魔王はそう、ロシュに告げた。
礼を言つた後すぐ立ち上がり後ろに振り返り謁見の間を後にしようとしたロシュに魔王は問いかけた。

「これで・・・良かつたのか?」

「これが・・・マリアの為なのです。あつと今頃、結婚がなかつたことになつてマリア自信心の中では喜んでいることでしょう。」

問い合わせるように後ろを振り向くと同時に魔王は言った。

「マリア姫はお前が別れをつげたあの日から部屋にこもりきりで何も誰も部屋にうけつけぬらしいぞ？それに、お前が別れを告げた後

マリア姫を最初に見つけたのはユリアス殿らしいが、本人の話だとマリア姫の瞳からは光が失われ頬には泣きじやくつた後まであったそうだ。私がマリア姫を最初見かけたときはとても清んでいて美しい瞳だと思ったがな、そんな美しく清んだ瞳から光が失われると言う事はよほど悲しい事があつたとしか私は思わんが？」

「っつ・・・

ロシュは何か言いかけたが言つのをやめ魔王から視線をそらした。だが、魔王の話は終わりではなかつた。

「ミルオン王に話をした後、私は心配になつてなマリア姫の寝室に行つたのだが、マリア姫は眠つていたよ。その瞳の下の頬は確かに赤く腫れあがつていたな。かわいそうに。腕などを見たら3日飲まず食わずなのか痩せ細つていたぞ。」

「！？ 3日飲まず食わず！？」

それを聞いたロシュはまた魔王に視線を向け叫んだ。

だが、確かに頬は腫れ3日飲まず食わずではあるが魔王はマリア姫の寝室へや行つてなどいなかつた。そう言えども、ロシュが心配してマリアの元へ赴くと思つたからだ。

「で、ですが・・・私には・・・もう・・・」

はつきりしないロシュに魔王はいらだち始めていた。

「強いて聞くが。」

魔王の言葉にロシュは俯いていた顔を上げ魔王の方に向いた。

「お前、マリア姫の気持ちはちゃんと聞いたのか？」

「・・・・・」

「・・・・聞いていないのだな・・・・」

ハア／＼／＼／＼。というため息を魔王から聞いたロシュは魔王に言った。

「で、ですが！私はマリアを守りたい。あの時のようにマリアを悲しませたくない。マリアを悲しませる者達から救つてやりたい。たとえそれが私自信だつたとしても私はマリアを守ります。それが私にとつて悲しい事だつたとしても・・・。」

「ロシュよ。お前はちゃんとマリア姫に聞いたのか？『私の事をどう思つている？』や『結婚して良かつたのか？』など」

「…………いえ……」

「それではお前はただの決めつけだけで姫に別れを告げたと？」
ロシュはそれ以上何も言わなかつた。いや、言えなかつたのだ正しすぎて。

と、そこに

『ロシュ様！』

何者かの声がロシュの脳内に響いた。ロシュには誰の声なのかわかつていた。ミルオンに結界を張らせている魔神の声だつた。

「どうした？」とロシュが答えると光輝く物がロシュの頭上に現れた。それを見た魔王は驚かずただ見つめていた。

「ミルオン国内から馬車が一つ結界の外に出ました。馬は早馬のようで馬車の中をのぞいたところ、一人若い男と女が乗つておりました。女の方は何故か眠つてているようでした。」

「若い男女？」

マリアとユリアスか……若い男女が誰なのはロシュにも魔王にもすぐわかつた。と、そこで

『ロシュ様』

今度は足元から声がしたのでロシュは足元を見てみると、そこには子鬼が立つていた。

ロシュは肩膝を床につき子鬼と話がしやすいようにした。

「何があつた？」

「はい。どうやらサギネル国第一王子はミルオンにいらっしゃる姫君に求婚をしに行くようです。先ほど何人かの兵と黒いフードをかぶつた男を1名連れてミルオンに向きました。」

黒いフードの男、それはウイリアムに間違ひはないだらう。

と、そこで魔神と子鬼の話を黙つて聞いていた魔王が話をしだした。

「ロシュよ。マリア姫を迎えに行け。」

「ですが父上・・・・」

いまだにまだ迷つている息子に魔王は怒鳴つた。

「何を迷つてゐる！今迎えに行かなればこの先一生マリア姫には会えなくなるのだぞ！姫を守ると決めたのであるうーそれでいて守るために結婚までしたんだ！お前の私利私欲のためではないのだぞ！何を迷う！姫と結婚したのはお前だ！これから時間をかけていけば姫がお前のこと好きになることはいつかきっとくることだ！」

「・・・・・」

そこで魔神が言つた。

「ロシュ様。失礼ながら私も魔王様と同意見でござります。あなた方は我々普通の魔族より長い時を生きるでしょう。それを証拠に魔王様はもう一〇〇〇〇年生きていらっしゃりあなた様は4〇〇年生きていらっしゃいます。ですがロシュ様のお母上は人間の御子でした。人間は長くて1〇〇年しか生きられません。魔王様は知つておられるのでしょう。人間を好きになつた魔族の結露を・・・。そして魔界と人間界とでは時間の立ち方が違うということを」

その言葉にロシュははつとしたように魔王を見た。

魔王は苦々しく魔神の声のする光の方を睨んでいた。
まるで「このお喋りめ・・・」とでも言つよう。

そして溜息をつき一瞬俯いた魔王はすぐロシュの方に目をやると言った。

「私が愛したのは生涯あれだけ・・・あれ以外に何もいらぬあれとの間に生まれたお前以外何もいらぬ。お前も人間の娘を好きになつたのであらう？それならば・・・今を大切にするべきだ。姫を迎えて行け。」

魔王のその言葉を聞くとロシュは決意したような強い眼差しを魔王に向け踵を返し謁見の間の扉を開けた。そして魔神と子鬼に言った。

「お前たち、今マリアがどこにいるかはわかるな？子鬼は今までどおりサギネル王子を見はれもしミルオンに到着したり姫がないことに激怒し暴れるようなことがあればすぐ私に知らせろ。そして、お前は私をマリアの元へ案内しろ。」

そう言いロシュは後ろに振り向き魔神の方を見やつた。その瞳にもう迷いはなかつた。

その言葉を聞いた謁見の間にいた使用人・従者・魔神・子鬼はホッとしたように胸をなでおろしていた。そして魔王は悲しそうな、それでいて呆れているような表情でロシュの方を見ていた。

そして

「ロシュよ。あの時渡した薬は持つていいるな？」

あの時・・・マリアがサギネル国から魔法をうけて戻ってきたとき魔王から渡された瓶のことだ。

「はい」と返事をしたロシュに魔王は言った。

「それを使う時は近々きつとくる。それをお前がどう使うかはお前次第だ・・・」

それを聞いたロシュは少し目を見開いたがすぐに微笑みそして謁見の間を出て行つた。

その頃城を出たムール率いる兵とウイリアムはミルオンに向かつていた。と、その時ウイリアムが馬を止めた。それに気付いたムールも馬を止めウイリアムに聞いた。

「どうしました？」

ウイリアムは空を見上げたまま舌打ちをしムールに言った。

「いえ、なんでもありません。少々用事ができましたので先に行つてください。必ずや後から追いかけます。」

ウイリアムがそういうとムールは何も言わずただ領き兵を連れてそのままミルオンに向かつた。

ムール達がいなくなるとウイリアムは小声で言つた。

「戻つてこなくていいものを・・・いいだろ。今葬つてやる。ロシュ。魔王の座は私のものだ。」

そう言いそのまま馬を走らせどこかへ行つてしまつた。

「う・・・・ん」

ガタゴト、ガタゴト

馬車の揺れで目を覚ましたマリアは何故自分が今馬車に乗つているのか、今まで何をしていたのか、何があつたのかを懸命に思い出そうとした。と、その時斜め前から聞きなれた声がした。

「起きたか？」

その優しそうな口調にマリアは聞き覚えがあった。異母兄のユリアスだ。そしてユリアスの声を聞くと同時に眠つてしまつ前に何が起こつたのかを思い出し頬を真つ赤に染め頬に手をあてた。

そしてマリアは緊張気味の心を静めるため大きく息を吸いそれを吐きユリアスに聞いた。

「兄上、どこに行くおつもりですか？」

ユリアスはしばらく沈黙し答えた。

「南に・・・今は雪が降り大変かもしれないが馬車だから兵器だろう。そこにある別荘に行く。あそこなら雪で馬車以外の「者」は来れない。」

「者」というものが何を指しているのかマリアにはわかつていた。そしてマリアはさつきも話したであるつ言葉をユリアスに言おうとした

「兄上・・・先ほども言いましたが。私は・・・・」

最後まで言い切る前に馬の泣き声が聞こえ馬車が急に止まつた。

ユリアスが扉を開け従者に声をかけようとした。

「おい！どう・・・・つ・・・」

その驚いているユリアスを見たマリアは不思議がつてユリアスの前を通り外に出た。外に出るときユリアスがマリアを止めた。

「ま、待て！マリア見るな！」

それでマリアは答えず外に出た。すると、馬の前で何日か前まで自分の傍にいてくれた人がそこには立っていた。そして、荒々しく息を吐いているその者はマリアに視線を向けると言った。

「マリア・・・すまなかつた・・・お前を・・・お前を・・・愛している。もう一度、私にチャンスをくれないか・・？」

その言葉を聞いたマリアは涙が流れ出てきたことにも気付かずそのままロシュの方へ駆け寄り抱きついた。そして。

「私も・・・私もあなたを愛しております。ロシュ様・・・」

そう言い一人はお互いを見つめあいそして微笑みあつたあとロヅケを交わした。ロヅケは涙の味がした。

それを馬車から下りて見ていたユリアスは儂いものをみるかのように二人を見つめていた。

「マリア・・・・・・

「憎いか？」

するとユリアスの耳元で誰かが囁いた。

「憎いであるう？ロシュが・・・お前はマリアがまだ幼い頃からマリアを愛していたのに。ロシュはそんなお前の気持ちも知らずお前の大切なものを奪つて自分のものにした・・・憎いであろうなあ・・・私が力を貸そう・・・」

その言葉を聞いていたらユリアスの瞳から光が失われた。

(そうだ・・・母上が死んだ後、私は悲しみそして誰にも心を開かなくなつた。そして父上は何を血迷つたのかまた新しく妃を迎えた。私はそんな父上を憎んだ。でも、マリアが生まれマリアが私を「あにづえ」と言葉が発せられるようになり私に駆け寄つてくる姿を見て。私は初めて自分のいる場所を見つけた。マリアの何も知らない清んだ瞳を私が守ろう。そう決めた・・・なのにあの男、ロシュ・ゾーンは結婚式の時初めてマリアと再開したのだというのにマリアの心を私から放した・・・あいつが・・・憎い・・・憎い・・・

ユリアスの背後にいた男は微笑んだ。

「ならば、私に体を委ねる。お前の憎んでやまないロシュを殺す手助けをしてやろう。」

そう言い魔法で自分の手に出した剣をコリアスの手に持たせた。

「これは魔族殺しの剣。これで心の臓を一突きすればロシュは死ぬだろう。」

コリアスは鞘から剣を抜くと構えた。それを見たコリアスの背後にいた悪魔はコリアスの体から離れた。その悪魔はウイリアムだった。

ジャリ。

石を蹴る音を聞いたマリアとロシュは音の鳴った方を見て驚いた。コリアスが瞳から光を失った状態で剣を構えていた。

「あ、兄上！？何をするおつもりですか！」

マリアはロシュの前に立ち庇うようにして、がすぐロシュに腕を掴まれロシュの背に庇われるよう後に隠される。

「コリアス様・・・その剣・・・どこで手に入れられたのですか・・・？」

・?それにその瞳・・・まるで・・・

(まるで、以前マリアがウイリアムに操られていた時のようだ。)ロシュがそう心の中で呟くとコリアスの背後から笑い声が聞こえた。ロシュとマリアがコリアスの背後、声のする方を見ると、そこにはウイリアムが立っていた。

「ウイリアム！？」

「ウイリアム様！？」

二人はほぼ同時にウイリアムの名を呼んだ。

「この前のマリア姫の魔法はすぐ解かれてしまつたな。マリア姫のお前に対する恨みが薄かつたせいか。だが、この者の憎しみは本物だ。だからまた魔法をかけさせてもらつたぞ。さて、今度は簡単に魔法が解けるかな？」

ウイリアムはそういうと「やれーお前のマリア姫を取り戻せ！」とコリアスに命令した。

その声に反応したかのようにユリアスは剣を振りおろしていく。
それをロシュの背後で見ていたマリアはロシュの前に駆けて出た。

「だ、だめ！……！」

そして、剣はマリアの胸に突き刺さった。ユリアスには返り血がかかり、自分の目の前で口から血を吐き倒れていくマリアを見たユリウスは我に返り叫んだ。

「！？！？」

その言ひ声は森中に響き渡つた。

倒れていぐマリアを支えたロシュは必死になつてマリアの名を呼ぶ。「マリア！マリア！－な、なぜ私を守つた！バカ者が！お願ひだマリア！死なないでくれ！」

マリアの名を呼び続けた。自分の腕の中にいるマリアが今にも死んでしまいそうだったからだ。

名を呼び継げないアーティストに反応し死ぬ」「なー」と思って呼び継けていた。

「ろ・・・しゅ・・・様・・・」

「…マリア…マリア…マリア…マリア…マリア…」

マリアは震える血まみれになつた自分の手をロシュに差し出した。ロシュはまだマリアを見つめ名を呼び続けながらマリアの手を握つ

「ふ・・・しゅ様・・・マリアは・・・しあ・・・わせです。」
のじる迷子・・・になつた私を・・・助けていただいたお返しが・・・
「できましたね・・・」

「マリア・・・覚えて・・・覚えていたのか・・・私は・・・私はあの時からお前を愛していた。泣いていたお前を守つてやりたいと

ずっと思つていた。だから……だからお願ひだ……死なない

でくれ……マリア……」

「わた・・しも・・・あの時か・・・・・

言い終わる時マリアは咳き込み口からいつぱい血を吐いた。そして息苦しそうにゼエゼエと息を絶え絶えにしている。

（ああ……死ぬつて……こんな感じなのね……）

そしてマリアは少し微笑んだ後コリアスを呼んだ。

「あに・・・うえ・・・・・

ロシュの田の前で頭を抱えうずくまつていたコリアスはマリアの方に駆け寄った。

「ま・・・まり・・・わ・・わたし・・・は

ガクガクと手を震わせながらマリアの頬にユリアスの手が触れた。マリアの頬は氷のように冷たかった。

「あに・・・うえ・・・なか・・ないで・・・わたし・・の・・だ

いす・・・な・・・・・

言い終わる前にマリアは瞳を閉じた。

もうしゃべる力もなくなつたのかただただゼエゼエと息を絶え絶えにしていた。

ロシュの掴んでいたマリアの手には力が消えていく。

「まー・マリア！ マリア！」

ロシュはマリアの名を必死に呼び続けた。

それを見ていたウイリアムは驚いたように目を見開き、舌打ちをし後ずさつた。

その時また石を蹴る音がしてユリアスが立ちあがつた。

そしてマリアの血のついた剣を持ち、構えウイリアムの前に立つた。

「ま、まて！ 私は悪くはないではないか！ 剣を振るつたのはお前だぞ！ 自分の責任を私に押しつけるのか！」

ワタワタとした行動をとりながらもウイリアムはユリアスにそう言い続けた。

するとウイリアムの背後から声がした。

『やはり……このようになるとになってしまったか……』

少し呆れたような声はさつきまでロシュが聞いていた魔王の声だつた。

その声を聞いたウイリアムの表情は血の気がひいたような状態になつていた。

「ユリアス殿。今ここでこやつにそれを刺すのも良いが、マリア姫がそれを望むとでもお思いいか？」

ウイリアムの背後に現れた魔王はユリアスにそつと話した。その言葉を聞き一瞬ユリアスの体は揺れた。

「この者は魔界の住人だ。よつて魔王である私の責任としてこやつは魔界に連れ帰り魔界の方法で処罰すると約束しよう。」

魔王はそういうと連れて来た兵にウイリアムを捕えさせた。

ユリアスは何も言わず、ただ黙つたまま剣を床に落とした。すると剣は灰となつて消えた。

兵がウイリアムを連れていくところを見ていた魔王はそのままロシュに声をかけた。

「ロシュよ。まだ姫は死んではない。お前の腕の中で生きておるぞ。忘れたのか? こういうときのために私があ前にあるものを渡したものだのを」

それを聞いて我に返つたロシュは何もない空間から小瓶を出した。その中には血のように赤い液が入つていた。

そしてこれを渡された時の言葉を思い出す「何か困ったことがあれば使いなさい。必ず助けてくれるはずだ」と、確かに魔王はある時そう言つた。

ロシュは小瓶の蓋を開け自らの口に含み息するのがやつとのマリアにロづけをし小瓶の中に入つていた液をマリアに飲ませた。

マリアが液を飲み込んだことを確認するとロシュは唇を放しマリアの手を握り続けていた。するとマリアの体からまばゆいほどの光が溢れ出てそれを見ていたロシュもユリアスも目を閉じた。

光が消えるとさつきまで力を失つっていたはずのマリアの手には力が

戻ったのかロシュの手を握り返していた。そして

「ん・・・・・」

呻くと同時にマリアは閉じていたはずの瞳を開けた。

「「マリア！？」

それを、見たユリアスとロシュは同時にマリアの名を呼んだ。

ロシュはすぐマリアの血の出でていたはずの傷を見たが、そこにはもう傷はなかった。ただ赤くそまりきられた後のある服があるだけで傷はどこにも見えなかつた。

マリアはそのまま何も言わず握られていない方の手をロシュの頬にあてロシュを見つめた。

「生き・・・・て・・・る？」

マリアがそういうとロシュは

「ああ。ああ！マリア！お前は生きている！」

そう言いロシュはあまり力は入れずマリアを抱きしめた。

マリアの肩になにか冷たいものがこぼれたようにかかつた。それに気付いたマリアは何も言わずただロシュの背に手を回し抱き返した。それを見ていたユリアスと魔王は安心したような表情をした。そして魔王はそのまま何も言わず魔界に帰つた。遠い昔を思い出しているような表情をしながら

その後、マリア・ロシュ・ユリアスは共にミルオン王国に帰りすでに到着していたムールにウイリアムのことを告げ。その場で崩れたムールにカルオ王はサギネル国とミルオンのこれからのことについてムールに話をした。話し合いの結果、元々サギネル国第一王子ムールは戦争など馬鹿げていると考えていたので考えが一致したということで友好関係がきずかれた。

両国はこれからさらに発展することだろう。

その話し合いから1週間後2度目のマリアとロシュの結婚式が行われることになった。

「さすが姫様ーやはり漆黒より純白のドレスが一番お似合いですね」

まるで我が子を褒めるようにロールはマリアのウエディングドレス姿を褒めた。

『世つかく2度目の結婚式なんだ。今度は漆黒ではなく人間界のや

ロシュはそう言つてくれたのだ。

マリアは恥ずかしそうに頬を染めた。するとハク酱がじたまでも聞いた。ローレン、ハク君の髪型で「いや、少し間

でノックした人物を見た。

「うふふ……口シ二様かいらうしやいました」

入れた。そして何も言つてないのに一や一や顔のまま部屋を出て行つた。

(もう！ロールつたら！)

「マリア・・・ロールはどうしたんだ・・・?」

ロールのニヤニヤ顔を見ていたロシュは意味がわからず首をかしげていた。

「アーティスト」

マコトはおとといじぶるかひなにフリをした。

そこで、マリアは口上の姿をマジマジと覗いた。
「モロコシ農業のうえで

合つね……)

マリアの視線に気付いたのかロシュは頬を真っ赤に染めた

「なんだ？」

「ええ、さすが口三様ですね。お似合いです」

声で

「お・・・お前も・・・立あつて・・・二九・」

それを聞いたマリアも頬を真っ赤に染めてしまった。

マリアが礼を言おうとするとロシュは片膝を床につけた。そして「マリア。改めて言おひ。10年前魔界で泣いているお前を見つけて時から私はずっとお前のことだけを考えていた。私と、結婚してくれない・・・か？」

ロシュは片膝をついた状態で上を眺め、マリアの顔を見ると。マリアは

「はい！私も10年前に助けてくれたあなた様が大好きでした！ひと時も忘れたことはありません！」

ロシュはそのまま立ちあがりマリアの腰に手を回し口づけをした。

その後一人は魔界に帰り魔界の王、妃となつた。

魔法を使う者（後書き）

「魔法を使う者」読んでくださった皆様ありがとうございました！^ ^
^ ^

この後一人は魔界で幸せに暮らして行く～・・・といつ設定でつす
もし皆様からの投票が良いよいうなりこの一人の子どもの物語も書いてみたいと考えています！^ ^

私の初ネット書き小説で初少しちょいエロ小説でしたが・・・まじめに書くの大変でした・・・特にエロシーンが・・・汗
エロシーン書くだけに何時間かかったことか・・・早く慣れたいものですね・・・。

さてさて、今既に何話か出でますが「御子と魔王」というお話が出ております。少しこね~つといのお話を読んでくれた方にだけ教えちゃおうかな・・・。
実は・・・「御子と魔王」は「魔法を使う者」と無関係ではありません！

詳しくは読んでみてくださいね^ ^ 読んだらきっと関係性がわかります！b

それでは皆様、今回はこのくらいにしておきましょうか？
作品を読んでいただきありがとうございました^ ^

「。 。 + バイバイ + 。 。 】 ^ o (* 、 、) ())

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5268p/>

魔法を使う者

2011年10月8日12時24分発行